悪左府

平野正喜

2015・05・08

場割

序幕　吉野山蝦蟇祠の場

二幕目　土御門殿頼長居室の場

三幕目　三条藤原家成館裏手の場

大詰　左京藤原忠実館門前の場

役名

一、藤原頼長（実は長子）

一、藤原忠実（頼長の父）

一、馬子　四郎

一、馬子　六郎

一、源義賢

一、田楽姿の男（実は藤原菖蒲若）

一、奴　蔵平

一、奴　萬治

一、奴　七之介

一、奴　雀次郎

一、奴　栄之進

一、奴　太郎

一、藤原家成

一、幸子（頼長の妻）

一、藤原兼長（頼長の子・子役）

一、吉野の上人（実は滝夜叉の怨霊）

序幕

吉野山蝦蟇祠（がまのほこら）の場

平安時代末期。白河法皇の院政期。

春だが寒い吉野山の中腹。

本舞台二重舞台、遠方に桜の山々、平舞台下手に二重舞台へのゆるやかな坂道、二重舞台の中央に屋根付きの祠（ほこら）、その左右は枯れすすき。

祠は茶色の幕で隠されている。

遠雷を思わせるドロンにて幕開く。

ト、平舞台上手板付にて馬子姿の若い四郎と年かさの六郎。

四郎　さてもも、不思議なことよの。

六郎　何ぞ、不思議なことがあるかい。

四郎　この季節、吉野山といえば満開の桜を愛でに来るべ。

六郎　きところ。なにゆえにこのような気の滅入る場所に。

六郎　それはそれ、忠実様には何ぞお考えあってのことであろう。忠実様は帝をも思うがままにするという藤原家の筆頭たる長者（ちょうじゃ）。我々下々の者には思いの及ばぬお考えがあってのことに違いない。めったなことは言うまいぞ。

四郎　うむ。それにしても、一面の桜の中、なにゆえ、こだけが枯れすすきに煤（すす）けておるものかも不思議よのう。

六郎　それはまさにそうだが。それよりも、忠実様は何ゆえお一人で先に進まれたかの方か気にならんのか？

四郎　気にしても仕方あるまいて。忠実様には何ぞ考えあってのことであろう。

六郎　こりゃあ、一本取られた。わはは。

ト、笑いはするが周囲の気配の重さに笑いは消え、そこにまたドロンと遠雷の音。

六郎　ここだけの話じゃが、女官どもは忠実様の夢見の悪さに関わりがあると申しておったぞ。

四郎　おお、聞いた聞いた。週に一度は夜中にうなされ、寝言を叫ばれるとか。それも、忠実様（ただみち）を許せぬとか、

六郎　藤が散るとか、家が滅ぶとか。こらこら、それ以上、言うてはならん。まるで、忠実様が御嫡男の忠通様を嫌うてらっしゃるようでは、ないか。忠実様に聞こえたらどうするのじゃ。

四郎　ここまで離れたら聞こえはせんやろ。

それにしても、長子様の可愛さと利発さには、たまらんのう。「四郎、厩に連れてって」と呼ばれてあのお可愛い瞳で見つめられたら、その日一日夢うつじゃ。

六郎　忠実様もたいそうのお気に入りじゃでなあ。二言目には「この娘が息子だったら」じゃから、そりゃあ、兄である忠通様が気を悪くするのも当然のことじゃて。

四郎　忠通様の任官が決まり、三条に移られて、みな、ホっとしたことよのう。忠通様はどうにも狡いところがあって、皆、困っておったことだし。あれでは忠実様になおさら遠ざけられるのではなかろうか。

六郎　忠通様は御生誕からずっと長子様を羨んでおったことは、まるわかりでのう。わしのような年かさの者どもの間では心配の種じゃよ。いつか、良くないことにならぬと良いが。

四郎　おお、怖い怖い。早いとこ帰ってもっきり酒にありついて、田楽の稽古の続きをしたいものだ。

六郎　お前さんはホントに田楽が好きじゃのう。

四郎　おお、子供ができたら田楽役者にしてやろうかとまで思っておるよ。

六郎　嫁に嫌われぬと良いがのう。ほほほ。

ト、そこにまたドロンドロンと遠雷の音

六郎　こりゃあ、雨になりそうだ。忠実様は、もし雨になったら少し降りて休みどころで待っておれとのこと。

四郎　それじゃあ、さっそく。

両人　下がろうかい。

ト、四郎、六郎上手へ入る。知らせの柝で茶色の幕を落とすと祠が現れる。

花道より馬に乗った烏帽子・狩衣姿の忠実。思

いに耽りながらゆっくりと七三まで来て馬を止める。

忠実　あれに見えるは蝦蟇の祠か。夢に見た通りの枯れすきの中、間違いない。

ト、馬をうながし下手の坂から二重舞台に上がり、祠の手前で馬を下りる。

忠実　エイ、ここまで来てはみたけれど、我をここに呼びつけし吉野の上人（しょうにん）とやら、出て来いと言わば、出て来るものか。

ト、見渡すと、ドロドロと共に祠の扉が左右に開き、中より大蝦蟇が現れる。忠実はあわてて下手へしりぞき、馬の前足で止まる。馬は恐怖で暴れるが、大きなドロンで動かなくなる。

忠実　何奴じゃ。

ト、大蝦蟇は口を開く。ここより、滝夜叉の怨霊の付け声（男声）にて。

大蝦蟇　忠実どの、よくぞ参られた。儂こそは吉野の上人と呼ばれし者。

ト、言われて忠実は正気を取戻し、

忠実　そ、それは奇怪なり、上人ともあろう方が何ゆえそのようなお姿に。

大蝦蟇　これもまた修行ゆえ、気に召さるるな。それより、時が移る。聞くが良い。

忠実　ハ、ハア

大蝦蟇　何度も夢で教え奉（たてまつ）った通り、そちの藤の家の大事を告げねばならぬ。

忠通どのは忠実どのの種ではない。よって、藤の家を継がせてはならん。娘御（むすめご）、長子どのこそ藤の家の次の長者なり。男として育てるが良かろう。

忠実

た、忠通はわが子ではないだと？

しかも、長子を次の主にだと？

な、なにゆえ、そのような。

大蝦蟇

続きを聞け。その弟君の菖蒲若どのは、本日、まさに、馬にも乗れぬような体になるであろう。また、長子どのは子の産めぬ体になる。月の物に煩わされず、政事に励むと良かろう。

忠実

な、なんと申された？

菖蒲若と長子の身に大難ありとでも言うのか？

蝦蟇

二度とは言わぬ。

ト、そこに雷鳴と稲光。忠実と馬は落雷に触れたのか倒れ伏す。ドロドロにて、祠の後ろから古びた傾城姿の滝夜叉の怨霊が現れ、妖力（仕掛け）にてススキを二手に倒して前に出る。

滝夜叉

ヤレ、愉快なり、我が蝦蟇の妖力にて藤の家の長者も思うがままじゃ。

思い起こせば百三十余年前、父上・将門公を射殺したという俵藤太。その藤太に連なる藤の家の者どもの、この日の本の真の主でもあるかのような振る舞い。ええい、許し難し。わが妖力にて、打ち倒して見せんと思えども、大宅太郎光圀との争いで生身を失い怨霊と成り果て、残るは蝦蟇使いの力のみ。藤の家の長者を誘い込み、大蝦蟇の力を用いて少しずつ内側より崩すしかあらず。エエイ、口惜しい。じゃが、必ずや、父上の恨みを晴さん。エエイ！

ト、滝夜叉の怨霊が手を振るとドロドロにて大蝦蟇がつぶれるようにススキの中に消え、滝夜叉の怨霊の手に蝦蟇色の鞍布が現れる。知らせの柝で、鞍布は差し金の仕掛けにより馬の背に移る。

滝夜叉

これで良い。これで馬に乗り移りし大蝦蟇を介して、ゆっくりと時をかけて忠実に憑りつかん。事を急いて大業半ばで倒れられた父上・平将門とは違い、自らの意志で怨霊と化した我にはいくらでも時間があ

る。藤の家の者たちよ思い知るが良い。ハハハハハ。

両人　忠実様ア。

四郎　忠実様があんなところに。

六郎　これはいかん、急がねば。

ト、二重舞台への坂に駆け寄ったところで、倒れている忠実を見付け、

ト、坂を駆け上がって忠実を抱き起す。忠実は気づいて、

忠実　こ、ここは。ウ、いかん、すぐに帰るのだ。馬を引け。

六郎　ハハア。しかし、馬も。

ト、言いかけるや、馬は機械仕掛けかと思われるような不自然な所作で立ち上がる。

六郎はいぶかしみつつも、ホっとした顔で忠実を促す。

忠実は四郎に助けられて馬に乗るが、乗った途端にドロドロが鳴り、忠実の手足が引きつり、表情が狂気じみたものに変わる。

四郎と六郎は恐怖の余り腰くだけになるが、

馬　（怨霊の付け声にて）ゲコ

ト、鳴いた途端にドロドロが止まり、忠実の様子も正常に戻る。

忠実は何もなかったように。

忠実　急ぐのだ。長子と菖蒲若に言い含めねばならん。急ぐのだ。

ト、馬をせかし、腰を抜かしたままの四郎と六郎を下手に残し花道へ。

幕

ト、忠実は花道七三にて、

忠実　夢に出し吉野の上人、急ぎ逢いに来たはずが、思いもかけぬ大蝦蟇姿。しかも知らせは藤家の兇変、気ばかりせいて、

ト、言うを柝の頭。

忠実　馬が合わぬわ。

ト、向うから叫び声。

声　（声のみ）忠実様、一大事にございます。長子様と菖蒲若が落馬されてございます。忠実様ア！

忠実　ちいい、何たる不覚。間に合わなんだか！

ト、極め、バタバタにて向うに入る。

幕

二幕目

土御門殿（つちみかどでん）頼長居室の場

二十年後、御所近くにある頼長の館・土御門殿。

本舞台正面高足の二重舞台、本屋根付き、白木造りの屋体、中央に階、二重舞台の上手に御簾が下りている一間、中央の広間の襖（ふすま）は閉じている。平舞台下手に廊下、庭と松の木。全て、夕方の土御門殿頼長の館の体。

着付袴（きつけかみしも）の奴（やっこ）六人が二重舞台広間の前に板付。琴ト、静かな合方になり、歌にて幕開く。

蔵平　サテ、頼長様には飛ぶ鳥を落とさんばかりの出世にて、左大臣（さだいじん）を拝命され、

萬治　我らが主（あるじ）、義賢（よしかた）様ともども三日続きの祝いの宴、

七之介　警護を務める我らにも異例の恩賞、ありがたや、

雀次郎　なにせ、我らは頼長様の、男ならざる秘密の掟、

栄之進　守りしことも義賢様の、厳命なれば命をかけて、

太郎　守りとおして勤め上げらん。

六人　お、戻られたようじゃ。それではお迎えに。

参ろうかい。

ト、奴六人は中央の襖を開けて中へ。琴歌止まり、襖が閉じる。

向うよりゆっくりと狩衣、指貫に烏帽子のすっきりとした男姿で頼長（長子）が歩いてくる。その後ろから着付袴、大小姿の義賢がよろしき距離を空けて従う。花道七三にて。

頼長　（男声で）なにやら後ろから声がするようだが。

義賢　おおかた、家成（いえなり）どのにございましょう。

頼長　困った男だ。好かぬ。いっそ、亡き者にできぬか？

義賢　そのようなことをおっしゃられては。

頼長　政事（まつりごと）も学問もできぬ貴族など、おるだけ害悪であろう。くだらぬ企み事を思い付いて世を乱す前に取り除いておくのが道理というものだと思うが。

義賢　いえ、それればかりは。

ト、バタバタにて花道よりドタドタと狩衣、指

貫に烏帽子の家成。烏帽子が曲がっていること

にも気づかず。

家成　待たれよ、待たれよ、左府どの、待たれよ。

ト、七三で待っている頼良と義賢の間に入る。

義賢はヒザをつき黙り込む。

家成はしげしげといやらしい目つきで頼長を上

から下まで見回してから、

ト、頼長はなかばうんざりと。

成、帝より五位を授かる家柄の長。その儂を。

家成　左府どの、何故、そう冷たくなさるのじゃ。この家

頼長　わたくしが冷たいとは、どういうことで？

家成　（ダラダラと）儂が着座する前に朝議を始めなさるは、

その後も儂の素晴らしい言上を一顧だにされず、仕

舞には帝への謁見も認めて下さらぬ。なぜそれほど

儂に冷たくなさるのじゃ。

頼長　特にそのような。

マア、確かにわたくしは刻限を守らぬ方は大の苦手

でございますが。

ト、頼長は家成に見えぬように冷たく笑う

家成　苦手などと、そのような、お優しいものではありま

すまい。この儂が左府どのともっと近づきたいと思

うておるのにもかかわらず、このような（ト、義賢

を見て）流行らぬ田舎者の源氏武士など従えて。

頼長　何と。

ト、家成を睨み付けるが、義賢の冷静な視線を

感じて気持ちを抑える。

家成　おお怖。これではそのうち、朝議の遅参だけで、わ

が館を打ち壊されてしまいそうじゃわいの。

ト、頼長はこれを無視して、

頼長　要件がそれきりでしたら、この辺で。

ト、頼長は花道から舞台下手へ進み、スタスタと袖に入る。義賢は後に従う。

家成は追うのを諦めた様子で花道から舞台上手へ進み袖に向かってダラダラと歩きながら、

家成　ホンに美しゅうて怖いお方じゃ。しかも、他に並ぶもののない博識さに、朝議の者どもが「すごい左府様じゃ」「怖い左府殿じゃ」「あれこそ悪左府じゃ」と言いふらすのも当然のことじゃな。まあ、そこがまた、たまらなく良いのじゃがの。

ト、掌で顔をなめて二ヤリとし、

家成　さあて、また、田楽の者どもを呼びいだすとしようかのう。特に、頼長どのにソックリなあの男。また、難題を申付けて困らせて楽しむとしようわいな。

ほっほっほ。

ト、家成が上手袖に入ったところで知らせの柝で、

太郎　（声のみ）左府どののお戻り。

ト、琴歌と共に、正面の襖が開く。

女房姿の幸子と子の兼長が中央に、奴六人が下手に居並んでいる。

義賢が下手廊下から出て上手に進み、奴と兼長の間に着座。

最後に烏帽子を脱いで髪を垂らした頼長が下手廊下から出て上手に進み、上座に着座。

幸子　頼長様、お帰りなさいませ。

一同　お帰りなさいませ。

頼長　（男声で）皆の者、出迎えご苦労。兼長も母をわずら

兼長　わず、賢き子であったか。

兼長　父上、御意にございます。

頼長　よし、頼もしく思うぞ。お前は藤の家の次の長者と

なるべき者。文武両道に励み、この父の望みに応え

よ。

兼長　かしこまりましてございます。

頼長　よし、母と共に下がって休むが良い。

幸子　ありがとうございます。

ト、幸子、兼長の手を引いて立ち上がり、義賢

と奴たちの前を通って下手に進み、廊下から袖

に出る。

頼長、足を組みなおして女性の居住まいになる。

これ以降は長子として女声で。

長子　義賢どの、お勤めご苦労様でした。

義賢　何のこれしきのこと。我も奴どもも、何か起こりせ

ば直ぐに動けるよう、気構えしが、何一つ事起こら

ず。気抜けするほどであった。改めて、頼長様。お

めでとうございました。

一同　おめでとうございました。

長子　ありがとう存じます。そして、ここに居るのはわた

くしと、源家（げんけ）の次期棟梁とも言われる義賢様、そし

て、気心知れた皆様のみ。どうか、ごゆるりと。

義賢　そうそう、ここでは、長子とお呼びなさいません。

義賢　ははあ。

長子　奴たち、息を吐いて緊張を解く。

義賢　それにしても気になりしは、右大臣・忠通どの。頼

長様の、ア、長子様の左大臣ご拝命を喜ばれるはず

無しとは、真のことかと。

長子　真に御座います。わたしくが五歳になりし頃、兄・

忠通は任官して館を出ましたゆえ、詳しくは知りま

せぬが、父に疎（うと）まれていたとのことで、わたくしと

も縁がありませぬ。共に帝を守り奉（たてまつ）り、政（まつりごと）を行う左

右の大臣として、話し合わねばならぬことも少なからず、懸念ばかりが頭に浮かびまする。

義賢　そういえば、長子様は五歳より前のことを覚えてらっしゃぬとは真で御座いますか？

長子　これまた真で御座います。父が言うには五歳の春に父の馬に勝手に乗って落馬し半死半生、その折に記憶を無くしてしまったと聞きました。

義賢　そのお父上の厳命により、長子様が男ならざりしことを漏らすものは一人としておらず。お父上のお力には、恐るべきものがございますなあ。

長子　わたくしは、時々、怖くなることがございます。

義賢　というと。

長子　父上のあの力、尋常ではありませぬ。時折、人ならぬ者の力を借りているのではなどとすら、考えてしまいます。

義賢　まさか、そんなことはありますまい。のう、者ども。

兵蔵　義賢様のおっしゃる通りにございます。長子様。

義賢　さて、ではそろそろ。

一同　かしこまってございます。

義賢　ト、手を上げると、奴たちはそれを合図に、ト、中央の襖をあけて奴全員が中に入り、長子と義賢は御簾が下りている上手の一間に移る。姿は見えず、声だけが聞こえてくる。

義賢　これでもう。

長子　では、義賢さま。

義賢　ト、閨事を思わせる間をおいて、

長子　ご気分がすぐれぬような…。平氏のことでございますか。

義賢　はい。兄・忠通は義賢さまの敵にあたる平氏の者どもと組んで次の帝を思うがままにしようと企んでおるという噂、真のことと分かりました。

長子　我は源氏の棟梁・為義が息子。度重なる平氏の横暴

はもう許せませぬ。

長子　そこでですが、義賢どのには、今、鹿ケ谷（ししがたに）においての俊寛僧都（しゅんかんそうず）と平氏討伐の策を練っていただきたいのです。

義賢　成る程、俊寛どのですな。ん？

ト、義賢は急に御簾を開いて、

ト、叫ぶと、庭の松の木の陰から田楽姿で覆面の男が現れる。上手から奴どもが入ってこれを追い、殺陣となる。田楽男は足が悪く、杖をついているが、杖を上手に使って奴を翻弄する。長子も御簾をまくって様子を伺うと、ちょうど、田楽男の覆面の一部がめくれ、目線が合う。

長子　エ…！

田楽男　この次こそは、

子に向かい、

ト、長子は引き込まれるような思い入れ。その後も、奴たちは田楽男に翻弄され、下手にて居並ぶもすり抜けられ、田楽男は花道七三にて長

田楽男　名乗らせたまえ。

ト、言うを柝の頭。

ト、義賢は御簾の一間を出て中央に立ち、

そのまま奥に駆け入る。

義賢　何奴じゃ、そこにおるのは！エエイ、奴ども、出合え。

萬治　足の悪（あ）し男一人、召捕れぬとはなんたる不届き。

義賢　エエイ、追え、追え。

萬治　申し訳ありませぬ。

義賢　かしこまってございます。

ト、奴どもも花道を走って入る。

義賢は地団太を踏んで悔しがるが、長子は放心状態で花道の向こうを見たまま。

幕

三幕目

三条藤原家成館裏手の場

翌朝の日の出前。身の丈ほどの土壁の長い塀。

下手に勝手口。高級貴族の館の裏側の体。

梵鐘にて幕開く。

ト、黒づくめの姿の栄之進が上手から、同じく

雀次郎が下手から。中央で立ち止まり、

雀次郎　居たか？

栄之進　おりました。間違いありませぬ。ひっ捕らえましょう。

雀次郎　それはならん。ここは家成どのがお館（おやかた）。勝手な真似をしては、義賢様の迷惑。しかも、長子様から隠密裏に顔のみ改めたいとの思召（おぼしめ）し。

栄之進　では、それとなくあの男が勝手から出て来るように仕向けましょう。

雀次郎　頼み申すぞ。

ト、栄之進は下手勝手口を静かに開けて中へ。

雀次郎は花道手前に移り、手持ちの笛を取り出すと、奥に向かってピーと一音鳴らす。

奥から尼僧姿、白頭巾にやつした長子が出て、足音立てずに七三へ。

雀次郎　まもなく出てくるものと。

長子　（女声）ご苦労様でした。ここはわたくしひとりに。

雀次郎　かしこまりました。

ト、勝手口から栄之進が出て来て雀次郎に向かい手を上げてから上手へ入る。雀次郎は長子に目礼して下手に入る。

長子、足音立てずに中央へ。そこに勝手口が開いて田楽姿に覆面の男が杖を突きつつ現れる。

田楽男　我に御用とはどなた様か。

ト、尼僧姿の長子に気付いて、

田楽男　あ、姉上？

長子　え？

田楽男　姉上に違いない。この菖蒲若（あやわか）を訪ねてくださったと

　　は…姉上、本当に本当にお会いしとうございました…

　　ト、菖蒲若は涙を流すが、長子はまったく合点

　　が行かず、

長子　わたくしに弟はおりませぬ。それに、菖蒲若とはわ

　　たくしの幼名。なぜ、それを名乗りまするか。それ

　　よりも貴殿は何故わが館に忍び込まれましたのか、

　　そして、その目、わたくしと全く同じその目を見て、

　　貴殿の顔を、顔を見たくて参りましたところ。

　　ト、矢継ぎ早に言いかける長子を田楽姿の男は

　　引き留めて、

菖蒲若　やはり姉上は、この菖蒲若のことは覚えていらっし

　　やらずか。無念でございまする。真に無念にござい

　　ますする。

　　五歳のみぎり、姉上と共に馬から落ち、気が付くと

　　私は一人で介抱されており、姉上のお姿を探そうに

　　もケガがひどくて起き上がれずにいたところ、遠出

　　から帰られたばかりの父上にそれはそれは強いお叱

　　りを受けたのでございました。しかも、その日のう

　　ちに館の外に出されてしまったのでございます。

長子　そ、そんなことなど…

菖蒲若　続きをお聞きくださいませ。私は何も分らぬまま、

　　二度と館に入ることは許さぬという父上のご命令で

　　厩番（うまやばん）の四郎の家にて育てられてございまする。

長子　そ、それでわたくしと二度と会えなかったとおっし

　　やるのですか。

菖蒲若　その通りでございます。私は密かに元服を迎え、に

　　も関わらず、菖蒲若に代わる名前を与えられず。今

　　かりで、

　　ト、悔し気に語る菖蒲若に長子はただ驚くば

日まで過ごして参りました。

四郎からは、姉上が記憶を無くされていること、私が二度と馬に乗れぬ身体であり、藤の家には無用の存在であることのみを密かに教えて貰いました。

長子

なんということを…

菖蒲若

父上の館に入れて貰えない私は、四郎に教わりし田楽のみを心の支えにしておりました。先般、家成さまお抱えの田楽の者どもが近くに参りしとき、一大決心して平作の元を逃げ出して紛れ込み、父上や兄上の目に触れぬように姉上の姿を一目見ようと…、

長子

それで田楽姿で…

ト、菖蒲若は少しずつ長子に近づきながら熱情をこめて、

菖蒲若

姉上、菖蒲若は、菖蒲若はこの二十年の間、いつか姉上にお会いすること、それだけが密かな望みでございました。五歳まで私はずっと姉上の後を付いて歩く気の弱い弟でございました。そのことまで、お忘れでございますか。姉上。

ト、菖蒲若は長子の近くまで来る。

思いに沈んでいた長子は、やっとこれに気付き、慌てて後ずさる。

長子

な、なにを言われますのか。確かにわたくしは五歳のみぎりより前のことを覚えておりませぬが、菖蒲若なる弟がいることなど、信じられませぬ。

ト、頭を振る。そこで、菖蒲若は覆面を取ろうとうなじに手を回す。すると、ドロドロと共に、差し金の仕掛けにより蝦蟇色の鞍掛布が空を飛んで土塀の裏に入る。

そして、菖蒲若の背後の土塀が崩れ、中から大蝦蟇が現れる。ドロンと打ち上げてから、以後、滝夜叉の怨霊の付け声（男声）にて。

蝦蟇

顔を見せてはならぬ。

ト、バタバタにて大蝦蟇は両手を振り上げ、菖蒲若は連理引にて両手を上げたところを柝の頭。大蝦蟇が両手を下げると同時に田楽男も手をぶらりと下げ、長子を見つめたままで不動となる。

長子（男声に戻って）な、何奴？

蝦蟇藤原頼長どのか。やっとお眼にかかることができ申した。我こそは吉野山の上人と呼ばれし者。

長子な、なんと。（気持ちを落ち着けて）

否、そんなはずはあるまい。吉野山の上人は既に入滅されたと聞く。そして、その奇怪な姿。どこぞの化け物が、上人の名を語らっておるに違いなし。何奴じゃ、本性を示すがよい。

ト、白頭巾を脱ぎ捨てて蝦蟇を睨み付ける。

蝦蟇さすがは悪左府と呼ばれる頼長どの。騙されてはくれぬか。ふふふ、それで良い。それで良い。我こそは藤散らしの大蝦蟇。おのれらの藤の家を根絶やしにせんとする者なり。

長子な、なんと。奇怪な。

ト、長子は懐中から短刀を取り出し身構える。

蝦蟇そのようなものは私には利かぬが。うぬが豪胆さと博識、ほれぼれするのう。とはいえ、これも縁（えにし）。先に悪左府どのから葬ってくれよう。

ト、菖蒲若の前にのっそりと出ようとしたところで、

蝦蟇ぐう、なぜ体が前に出ぬのじゃ（女声で）こ、これはやはり。

ト、蝦蟇はたじたじと菖蒲若の後ろに戻る。

（女声のままで）くううう、お前はいったい何に守られ

ておるのじゃ。おのれらが幼き日、あの落馬の時にも何ゆえかお前は傷一つ負わず仕舞。我が呪いにより、お前は子の成せぬ身体になるはず成りしが、お前はお前自身の力にて記憶を消すことでわが呪いを無に帰した。五歳の小娘にそんなことができるはずなしと、いぶかしくてならなんだが、やはり故あってのことか。

長子（油断なく刀を抱えたまま）うむ、貴様の正体は女子か。我が力にて我が記憶を消しただと。全くもって覚えがないが、我が幼少時の災いもまた、うぬの仕業であったとは。今日初めて知ったことだが、

ト、不動のままの菖蒲若の方を見て眉をしかめ、

長子　ような悲しき定めに追いやったのも貴様の仕業とは。

我の弟だというこの男をこのような身体にし、この工エイ許せぬ。何故、我が一族を呪うのかはわからねど、その邪なる執念を我が刀にて鎮めてみせん。

化け物、そこになおれ。

ト、大蝦蟇は地団太を踏み、

蝦蟇　ええい、悔しや、悔しや、手も足も出ぬとは。うむ、待てよ。

ト、ひとりごちて、

蝦蟇　何にかはわからねど、守られている者を害すること をできるのは肉親の者のみと聞く。しかも、まだ顔をみせておらぬから、我が思いのままじゃ。よし、こうじゃ。

ト、バタバタにて、大蝦蟇は連理引にて菖蒲若を動かし、長子に襲いかからせる。

長子　無表情で人形のごとき動きながら杖を振り回して襲ってくる菖蒲若に長子は恐怖に襲われ、

長子　な、何をするのじゃ。

長子（女声で）ああ、な、なんということを。あ、菖蒲若どの、菖蒲若どのっ。

菖蒲若姉上…。もはやこれまで…。

長子おお、菖蒲若どの、死んではならぬ。ここで命果つるとは、あまりに、あまりにそなたが不憫じゃ。

菖蒲若（息絶え絶えで）どうやらわたくしの命はここまでの様子。

長子なぜにそのようなことを。父上を、私が父上を説得するゆえ、このような理不尽はもう続かぬように。

菖蒲若無理でございましょう。父上…御館様は何者かに心を握られておいでの様子。姉上のみの力では及びまずい。

蝦蟇それ以上は言わせぬ！

長子息使いで顔を上げ、ト、長子が頭を抱き抱えると菖蒲若は苦しげなりかかろうとするが、大蝦蟇の連理引で菖蒲若が間に入る形になり、長子は菖蒲若の脇を貫いてしまう。菖蒲若はうつぶせに倒れる。

ト、長子は菖蒲若の身を避けながら大蝦蟇に切り、蝦蟇は長子に背後から襲い掛かろうとする。蝦蟇は悔しそうに、が見えない力に止められる。

蝦蟇まあ、良いか。もう息は持つまい。

長子菖蒲若どの！

田楽これで良いのです。姉上、父上には決して油断なさいませぬよう。ああ、姉上の胸元で最期とは夢のようでございます。おさらば。

ト、田楽男はこと切れる。

蝦蟇藤の家を内側より崩したしとの我が望み、これで一つ成就したとしよう。今日はここまでで良い。エエ

イ。

ト、大ドロにて大蝦蟇は長子を避けて花道へ進み、スッポンから煙と共に下がる。

大ドロを打ち上げると、上手より栄之進、下手より雀次郎が出て、

雀次郎　ヤヤ、これはいかに！

ト、雀次郎は放心状態の長子の前に膝をつく。

栄之進　栄之進は田楽姿の男の脈を取り、すでに手遅れ。いかにいたせば…

雀次郎　義賢どのをお呼びして、ご采配をあおぐのだ。

ト、バタバタにて花道より着付袴、大小姿の義賢が駆け寄り七三にて、

義賢　いかにした？

雀次郎　長子様はご無事でございますが、さて、この男は、

栄之進　どうやら長子様が刃にて落命せし様子。この男は家成さまお抱えの田楽どもの一員とか。

義賢　なんと！それはいかん。しかも、その土塀の崩れ、これも長子様の仕業ゆえか？

栄之進　わかりませぬ。長子様は我々を遠ざけられてお一人で相対してらしたゆえ。

義賢　ウム。

ト、栄之進に促すと、

ト、少し考えてから手を打ち、

義賢　奴ども、出合え。そして、この土塀、すべて壊してしまえ。そして、この男がその下敷きになるようにせよ！

雀次郎　かしこまりました！

ト、バタバタにて、上手と下手から残りの奴が現れ、土塀を力任せに壊し始める。義賢は長子を菖蒲若の遺体から引きはがして抱きかかえ、

義賢　長子様。何があろうとお助けいたす。

長子　ト、長子は正気に戻り、

長子　こ、これはいったい…

義賢　お気にされませぬよう。サ、少しも早う、この場から

長子　ら。

長子　は、はい。

長子　エイ！

ト、義賢が長子に肩を貸して花道へ。

しかし、七三にて、ドロドロにて動きを止められる。奴たちも静止する。唯一動ける長子、ふと思いついて胸のあたりを手で押さえ、

ト、ドロドロが止まり、全員動けるようになる。

義賢は驚きつつも、そのまま長子を抱えるように向こうへ急ぎ入る。

幕

大詰

左京藤原忠実館門前の場

一ト月後。鳥羽上皇が崩御し、保元の乱が勃発。

舞台上手に大きな門。扉は閉じられている。下手はすすき野。空は赤く、御所が燃えている炎が遠く見える。都の郊外にある藤原忠実の館の門前の体。

太鼓の連打にて幕開く。

ト、バタバタにて、花道より鎧に怪我人姿の太郎、下手より鎧姿の兵蔵が出る。

兵蔵　他の者は？

太郎　バラバラにて。しかし、忠実どの御館にて合流せんと、言い合わせてございます。

兵蔵　良し。それにしても、急なことであったな。

太郎　まさに。もともと義賢様を嫌いし家成どのは、館打ち壊しの一件以来、義賢様のみならず、長子様までをも不倶戴天の敵（かたき）として憎まれておりました。しかし、帝が崩御された途端に、忠通どのと家成どのが手を組み「悪左府、頼長の謀反なり」などと騒ぎ出すとは、驚くしかなく。

兵蔵　様と義賢様に謀反の心有りと言われたとか。笑止千万の話だが、これに忠通どのが同調して騒ぎ立てたゆえ、このようなことに。

太郎　（驚いて）吉野山の上人とは！

兵蔵　なんでも、夢に吉野山の上人とやらが現れて、長子ああ、長子様の弟、菖蒲若君を死に追いやることになった御敵、あの大蝦蟇の化け物の怪しき仕業に違いなし。

太郎　それにしても、平家どもにかつがれた次の帝がこれにお墨付きを与えられるとは、いったい何というこ

太郎　一にも二にも憎らしくは平家の者ども。義賢様と俊とだ。

兵蔵　寛僧都との密談がモレたのも、あの化け物の仕業に違いありませぬ。僧都もすでに捕縛され、明日にも遠流（えんる）のお沙汰とのこと、世も末とはこのこと。

ト、太鼓の合図にて、兵蔵、花道の向こうを指さし、

兵蔵　オオ、他の者たちが。オ、長子様も、義賢様もいら
っしゃるようだ。
ト、向こうより、鎧に怪我人姿の他の奴四人、
馬上に着付袴、大小姿の義賢、その後ろに四郎
と六郎に担がれた駕籠。花道よき所にて止まり、
義賢　ここまで来ればこちらのもの。御所に火をかけられ、
取るものも取りあえずここまで落ち延びたが、陣を
立て直せば、平家どもに劣る我らではない。皆の者、
良く生き延びた！
全員　ハハア。
義賢　それ、もうすぐ忠実どのの御館だ。ウム？　なぜ閉
門なのだ？　長子様が知らせ、すでに届けてあるは
ずではないのか？
萬治　お知らせ申し上げましたが。
ト、駕籠の中から、
長子　（女声）門前にて降ろしてたもう。わたくしが確かめ
ます。
ト、一行、下手に駕籠を移し、取り囲む形とな
る。
狩衣姿の長子が駕籠から降り、
長子　わたくし自ら尋ねに参ります。
義賢　そんな危ういことを。
長子　構いませぬ。この閉門、父上になにか考えがあって
のこと。であれば、わたくしでのうては、ご本心を
答えて貰えますまい。どれ。
ト、義賢のそばをすり抜けて中央へ。門に向か
って、
長子　父上、ご開門を！

義賢

忠実どの、いったいなぜこのような。

の忠実が弓を持った姿で現れる。

が抱き起す。すると、門が大きく開き、狩衣姿に倒れ、バタバタと共に慌てて駆け寄った義賢もに矢が長子の胸に突き刺さる。長子は仰向けト、門が少し開くと同時にヒュウという音と

忠実

・悪左府・藤原頼長を誅せしものなり！

ト、長子は虫の息にて、

長子

な、なんと、おっしゃいました、父上？

忠実

そちが先月殺めしは、そちの双子の弟・菖蒲若なり。

実の弟を手に掛けるとは決して許せぬ所業。

ト、長子は驚き、義賢と顔を見合わせて、

長子

で、では、あの時、家成どのの館にいたのはやはり

忠実

真の弟なりしか。父上、何故にこのようなことに…

そちの兄の忠通は我が子にあらず、そちの弟の菖蒲若は馬にすら乗れぬ身となった。これらはすべて、

吉野山の上人様のおっしゃられた通りのこと。それ故、上人様の勧めにより、男ならざるそちを長者に決め、男として育てたのだ。

長子

父上、わかりませぬ。なぜにそこまでその上人とや

忠実

らの思うがままに…

聞きたいと申すか？

では、聞かせてやろう、それはな、それはな…

ぐおお！

ト、忠実は急に苦しみだす。ドロドロと共に、

忠実の背後からススキを割って大蝦蟇が現れる。

四郎、六郎は恐怖にかられて悲鳴を上げながら下手に逃げ入る。

以後、滝夜叉の怨霊の付け声（男声）にて。

蝦蟇

それもこれもお前の父親の心の闇が招きし事。

長子

お、お前はあの時の…

ト、長子、虫の息ながら

ヤレ、愉快なり、藤の家の長者を誘い込み、蝦蟇の

力を用いて少しずつ内側より崩すという我が願い、

いよいよ成就の時を迎えん。生身を失い、怨霊と化

してから気の遠くなるほどの時を経つつ、藤の家に

呪（しゅ）の種を蒔き続けてきたが、自分の息子を嫌い、娘

に許されざる欲を持った忠実どののお蔭で、その種

が芽を出し黒い花が咲いたのだ。

長子

な、なんということを…

蝦蟇

ところが、だ。頼長、お前には亡き母の霊魂の守り

厚く、肉親ではないいずれの者にもお前を傷つける

ことは叶わぬ。このままでは手も足も出ぬゆえ、過

日は菖蒲若を操りて挑んだが、事が成る前にお前に

防がれ、無駄骨を折った。

だが、お前の父親が正気を失うほどの怒りに身を任

せる時を逃さず事を起こせば、出来ぬことはない。

そこで馬を介して忠実に憑（と）りつきつつ、お前が許し

難い罪を犯すように仕向けたのだ。

お前の命運が尽きれば、藤の家の残る者どもは小者

ばかり。放っておいても忠通の馬鹿者が内側から崩

してくれよう。ついでに、目障りな源氏の者どもの

も滅ぼしてくれるわ。源氏の棟梁、為義とやらも、

今頃、討ち取られておろう。ワハハハハ。

義賢

な、なんと、父上まで！許さん！

義賢

る。

ト、長子を抱えたまま長刀を振るうと、大蝦蟇

に届きはしたが、傷一つつけられず跳ね返され

義賢

そ、そんな。ぐう、無念だ。勝てぬのか、この妖怪

に一太刀を浴びせることすら叶わぬのか。せめて、

この妖怪の正体がわからぬものか！エエイ！

ト、悔しがると、長子は苦しい息を吐きつつ、懐より筒状に丸めた源氏の白旗を取り出し、

長子　よ、義賢様、これをご覧あれ。

義賢　こ、これは父・為義から聞きしも、行方知れずという源氏の白旗！なぜに今まで長子さまが？

長子　五歳のみぎり、この者の仕業による落馬にて記憶をなくせし私が身に着けていたもので、聞けば、亡き母上の形見とのこと。元は源氏の血の源たる清和（せいわ）の帝が拵（こしら）えさせ、その念をこめられたもので、平時に男が持てば世を乱すとの謂（いわ）れにより、帝の血を引く母上が守りし宝。後に乳母から、いつか、悪政が蔓延（はびこ）りし時は、源氏の棟梁に渡すことでその力を治世に生かせとのご遺言を賜っておりました。しかし、わたくしは左府の任にありながら、我が女ならぬ男ならぬ数奇な定めと、悪左府と呼ばれる気性を呪い、平将門さまのような、都ごと滅ぼしてしまうであろう力をお持ちの方に、これをお渡しするつもりでございました。

蝦蟇　（女声に戻って）な、なんと、申した。父上のような、じゃと？

ト、蝦蟇は驚くが、長子は構わず、

長子　義賢さまはお力はお持ちですが、お優しいお方。そして、都を守護するお方。わたしくは今日こんにちまで悩み、迷いつつ、肌身離さず持ち歩いておりました。この私の愚かな迷いが、このような災いを招いてしまったのでございましょう。

ト、長子は苦しみつつも続ける。

長子　先に、家成どのが館の裏にて、この大蝦蟇と相対しのち、皆が金縛りにかかりしが、衣の上からこの旗に触れたところそれがたちまちに解けたこと、まさに、白旗の霊力のお蔭。

ト、長子は最後の力を振り絞り、

長子

化け物め、聖なる力を受けるが良い！

ト、白旗を大蝦蟇に向ける。すると、大蝦蟇は

俄かに苦しみだし、

蝦蟇

ぐおおおおお！

我が父上が得られたはずの白旗の威

力に、我が責められるとは、なんたる皮肉！

エエ

イ、もう、ダメじゃ。今こそ、我が美しき姿を現さ

ん！

ト、大蝦蟇はつぶれてススキの中に引き込まれ、

スッポンから煙と共に古びた傾城姿の滝夜叉の

怨霊が現れる。

長子

よ、義賢様、我が命と、この白旗、義賢さまに差し

上げます。この怨霊を退け、源氏の再興を…

義賢

承りました！

ト、義賢が白旗を受け取ると雷鳴の　ごとくド

ロンが鳴り響き、忠実が目覚める。すっかり怨

霊の憑物は落ちており、

忠実

こ、ここはどこじゃ？

ト、死を迎えようとする長子に気が付き、その

瞬間、全てを思い知り。

忠実

な、長子！　こ、この弓は？　わ、儂は何故このよ

うなことを！

ゆ、許してくれ長子、儂はなぜ、お前を討ってしま

ったのだ、なぜだ、教えてくれ長子！

ト、弓を放り投げ、義賢から長子を奪い取って

抱きしめるが、長子は絶命する。

義賢は白旗を手に立ち上がり、

義賢　悪霊退散！

怨霊　ええい、ちょこざいな！

ト、義賢、奴たちと、滝夜叉の怨霊の立ち回り。

義賢たちは劣勢になるたびに白旗を広げ、怨霊の霊力を削ぎ落していく。滝夜叉の怨霊は力尽き、スッポンまで這い寄り、

怨霊　ええい、口惜しや！

義賢、許さじ！

我が呪いにより、そちの命運は間もなく尽きる。じゃが、その白旗が、その白旗が源氏を…

ええい、口惜しやー。

義賢　滝夜叉の怨霊、この源義賢が、

ト、大ドロにて滝夜叉の怨霊はスッポンより煙と共に下がる。大ドロを打ち上げると、

ト、言うを柝の頭。

義賢　退けたりーーーー

長子様のご遺言、源氏の再興は我がなさん。

もし、怨霊が呪いにて、我が命運、近々尽きる定めなりとも、この白旗のある限り、いつか我が子息が源氏を再興し、平家をこの都から叩き出さん！

行くぞ、皆の者！

一同　オーーー

ト、義賢、奴たち、バタバタで花道を威風堂々と進み、七三で極まる。

舞台中央で忠実が長子を抱えて泣き伏すところで

幕

奴六人、キザミにて、花道を進み奥に入る。

義賢、白旗片手の六法にて奥に入る。

幕

本作の著作権は平野正喜にあります。

本作は有料ですが、上演・放送・出版・転載されない場合は、代金はいただきません。

上演・放送・出版・転載される場合の料金は、ランドッグ・オーグ平野正喜事務所のウェブページをご覧ください。あるいは、日本劇作家協会にお問合せください。代金の支払いにより、脚本の使用を利用者に対し非専属的に許諾します。